

# ヴァイマル期における A.ザロモンの社会事業理論

岡 田 英己子

## 〔要 約〕

ドイツの社会事業職は女子社会事業学校制度の枠組みに拘泥したために、半専門職の地位に押し込められ、結果的には1950年代まで、中期フェミニズムの影響を受けて形成された社会事業理論と、ジェンダー化された職業倫理との一枚岩的な構造から脱却できなかつた。本稿では主にヴァイマル期に限定して、ザロモン理論を取りあげた。ヴァイマル期福祉改革の路線に即して、新たな課題を強いられるザロモンの生活環境の変化を探り、円熟期ザロモンの社会事業理論や教育論の新動向を概観した。特に初期理論との比較を行いながら、ザロモンが母性主義的社会事業理論を離脱し、アメリカの援助方法の導入やヨーロッパ型社会事業教育の国際ネットワークに尽力する経緯を述べ、同時に大学院レベルの「女子社会事業・教育職のためのドイツ・アカデミー」の設置によって、高度な専門職業人の教育に着手するに至る背景を考察した。さらにヴァイマル期のザロモン理論が民主化志向であるにもかかわらず、なおジェンダー化された職業倫理に呪縛される経緯を指摘し、晩年の理論破綻に繋がる原因が社会事業成立期の欧米理論に共有される欠陥であることを明らかにした。

## 〔キーワード〕

A.ザロモン、女子社会事業・教育職のためのドイツ・アカデミー、ジェンダー化された職業倫理、社会事業教育の民主化、ベルリン女子社会事業学校、パリ国際社会事業会議、国際社会事業学校連盟

## I. 序…ザロモンの理論破綻の原因を探る

### 1. ヴァイマル期ザロモンが理論形成に際して背負う課題

長年ドイツ・中欧では、保守主義と家族主義の混合物といえる権威主義的・家父長的な福祉思想の影響が強い。公的扶助と家族扶養優先の関係性に適用されるカトリック補完性の原理を、家族共同体型福祉国家の代名詞として解釈する人も多い。このドイツ型福祉思想の伝統をふまえながら、1980年代半ばからのザロモン研究ブームの成果を総括すると、ザロモン理論が二点にわたり構造的な差別問題を強化していたことがわかる。まず第一に指摘できるのは、初期の母性主義的社会事業理論は、特殊ドイツ的な「女性学」形成の前史となつて、ジェンダー化された職業倫理と家族政策を連結させ、しかも長期にわたり女性・子どもの一体化された関係性を正当化した点である。第二番目には、市民女性運動の方針である「女性の、女性による、女性のための」雇用政策が一定の功を奏したものの、1920年代に公務員型ワーカーや類似の対人援助サービスの長時間・低賃金労働を容認するという、男女の賃金格差を助長する労働政策を支えた点である。

上記の問題点は昨年、「A.ザロモンの初期社会事業理論」でも論述した(1)。若干重複する箇所があるものの、続編となる本稿では、ヴァイマル期から1937年のアメリカ亡命までの時期に限定して、ザロモン (Alice Salomon, 1872-1948) の新たな課題意識や理論形成の経緯を辿りながら(2)、母性主義的社会事業理論から離脱をしていたはずのザロモンが、なおそれに呪縛され、理論破綻の原因を払拭しきれなかった背景を考察する。

理論形成の時期としては、生存権保障・社会国家理念を標榜するヴァイマル期を前期と後期の二期に大別し、ザロモンが課題と認識したものを中心に検討する(3)。方法としては、生活感情と時代思潮に焦点を当てて、伝記類やザロモンの著作を分析して、彼女が置かれていた生活環境を明らかにし、思想を論理化していく経緯を重点的に辿る。

「ソーシャルワーク創出」の第一世代の理論家としても著名なザロモンは、ヴァイマル期に理論の集大成を試みる。民主化の時代の新課題として、何を彼

女が認識するのかの解明は、岡田の研究でも未発表のまま残した領域である。そこで本稿では、「ザロモンの生涯と活動」の総評も兼ね合わせながら、理論破綻に至る背景を探りたい(4)。

## 2. 本論文の構成

構成は以下の通りである。

まずII章で、総力戦に引き続くヴァイマル期福祉改革が、社会事業教育にどのような影響を与えるのか、それに呼応してザロモンの課題意識がどう変化するかを、概観する。III章ではベルリン女子社会事業学校の校長を譲り、1920年代後半に新分野に進出——国際社会事業学校連盟の創設と、「女子社会事業・教育職のためのドイツ・アカデミー」（以下ドイツ・アカデミーと略す）での高度な専門職業人の教育——するザロモンを支えた動機と条件を探る。さらにIV章では、「ザロモンの生涯と活動」の総括を試みながら、社会事業成立期の不毛な論争に代弁される負の遺産を研究する意味を考察する。なお全体を通して、ザロモンの栄光と、引き続くナチズム期・アメリカ亡命生活との境遇の落差をもたらした原因を考察することに主眼を置いている。

## II. ヴァイマル期社会事業教育とザロモンを取り巻く変化 …福祉改革の影響

本章では、1920年代前半のヴァイマル期福祉改革を取り上げ、社会事業教育が社会行政・福祉官僚制に組み込まれる経緯と、社会事業教育の変化が理論形成に際して及ぼす影響とを概観しながら、ザロモンが母性主義的社会事業理論からの離脱を図り、理論の集大成を志向する動きを追う。特に福祉改革がザロモンに強いた課題が、何であったのかの解明に重点を置きたい。

### 1. 福祉改革と制度化された社会事業職の功罪

#### 1) 福祉改革の概要

通常ヴァイマル期福祉改革とは、ヴァイマル憲法に依拠して制定される児

童・青少年福祉法と扶助義務令を起点に、公私関係の協働・分離の原則が確立するに至る1920年代半ばまでの法的枠組みと、それに伴う中央政府—地方政府の社会行政・福祉官僚制の機構再編をさす。この拙速な福祉改革は様々な問題をはらんでいたが、ドイツ社会の民主化を目ざし、社会国家理念・生存権規定を重視する政策立案過程の制度的なルートが全国にできる点は、評価されうる(5)。

第1次大戦後の1919年に制定されたヴァイマル憲法は、労働者の団結権や、経済における共同決定権等の社会権規定を盛り込み、国家の社会化を明示している点で、当時最も民主的と評された。特に151条の生存権の明文化によって、救貧事業と社会保険制度に限定されていた国家の権限が拡大され、社会国家・福祉国家理念の定着の起点となった。それは個人と国家の対立的な、あるいは疎遠な関係性から、「面倒見の良い」「民主的な」国家像への転換を意味した。個人と国家の親和的關係性が普及するかのようなイメージを抱かせる憲法であった。

さらに引き続き、1871年の救貧法にかわって制定された公的扶助に関する二法令、「扶助義務令、公的扶助の要件・種類・程度に関するライヒ基本原則」(1924年)によって、地方自治体の公的扶助行政と財源の基盤整備がなされ、資格を持つ公的扶助ワーカーや専門職を登用する福祉官僚制が敷かれ、ライヒ基本原則では具体的な給付の条件・種類・程度の規程も盛り込まれる。補完性の原理と個別化の原則に基づく公的扶助が明言され、貧困の予防と自立に向けた援助方法への転換——実際の相談業務では権威的なワーカーとクライアントの関係を前提にした抑圧的な援助方法が横行するものの——が、示唆された。

また児童・青少年福祉法(1922年)によって、救貧事業の原則とは明確に異なる権利主体としての児童を対象とする制度・政策が可能となった。単なる保護の対象ではなく、児童の教育を受ける権利が明記され、各自治体で設置される児童局を核に、従来の公的児童保護事業の集権化が目ざされた。後見制度や非行少年の保護教育等の規程もあるものの、児童を単なる保護対象と見なすのではなく、児童の人格を尊重する現代的な教育的援助の原則を掲げた点で、画期的な法律であった(6)。

福祉改革は上記の法的枠組みに基づいて進められ、乳幼児・母性保護から児童・青少年福祉（児童局）、公衆衛生（衛生局）や住宅（住宅局）、職業紹介所に至るまでの各種対人援助・生活サービスの制度と、最低生活を支える公的扶助とがリンクする構造を作り上げる。後のベヴァリッジ計画に比べると未熟な形とはいえ、ドイツ版「ゆりかごから墓場まで」の生活保障が、それも建前としては中央政府—地方政府間を通しての責務とされたのである。

## 2) 公務員型ワーカー像の功罪…量産される官僚的体質

そもそも社会事業職の国家資格に向けての動きは、総力戦を強いられた1916年～1918年に登場する。敗戦によって、1919年4月ドイツ女子社会事業学校会議で現実にそぐわない「医療モデル」の教育案は廃棄され、新たに衛生局と文部省とが合同して、ザロモン達の社会事業教育構想が討議に付され、1920年10月プロイセン国民福祉省令として結実する。この試験規程によって社会事業職の希望者は、社会事業学校卒業資格→国家（州）試験→社会事業従事者の資格認定・資格付与のルートを通過儀式として義務づけられる。これによって看護や保育から派生した社会教育や治療教育などの新種の対人援助の領域でも、同様の法的枠組みに基づく専門職化を目標とするようになる。

福祉改革の初期に、国家試験・資格認定によって社会事業職が制度化されたことで、女子社会事業学校は福祉局・児童局の末端公務員として学生を送り込める有利な雇用条件を確保した。この職業像と雇用先の確立に伴い、ドイツ全域の社会事業学校は、ヴァイマル期にあっては比較的安定した学生数を確保し、同時に卒業生を介して恒常的な社会事業理論の普及ルートも定着していく。またこの公務員型ワーカー像が、民間福祉団体のワーカー・施設職員の給与体系・業務内容をも規定する傾向——むろん民間の給与は大半が低いレベルに留まるが——も出てくる。第一線の現場や、卒業生を送り出す社会事業学校において、私的官吏に似た官僚的体質が制度的に量産されるという、今日の問題の構造もこの時期に初めて登場するのである。

では、こうした1920年代前半の社会事業教育と社会事業職の急変を、ザロモンはどう認識し、新しい理論形成に向かうのであろうか。次の2節ではまずザロモン個人の生活環境に焦点を当てて、課題として認識されたものを明らかに

したい。

## 2. ザロモン個人の生活環境と初期理論からの離脱の契機

ザロモンは、「女性の文化的課題」という1890年代に市民女性運動で流行したスローガンを社会事業教育に転用することで、理論家としてデビューを果たす。彼女の仲間の多くが財も権力もある名望家の父を持ち、「女性の社会活動に理解を示す」教養市民の夫の庇護の下で、豊かな生活を誇示していた。この一群にあって、さほど容姿に恵まれず、しかもユダヤ系であるザロモンが、短時間でスター性を獲得しえたのは、彼女の社交性と機敏な行動力の賜である。若き日のザロモンは、執筆によって生計を補っていた。それも神経質で気弱な母親の世話をしながら、である。「何を書けば売れるのか」の発想で執筆活動を始めるザロモンは、「女性の文化的課題」をボランティア論に転用するテーマを看板にすることで、マスコミや社交界に自分を売り込む秘訣を習得した。これがザロモン初期理論には、ストレートに投影されている。

ザロモンの生活はシュヴェーリン (Jeannette Schwerin, 1852-1899) 亡き後に、講習会の責任者になる頃から好転する。しかしながら、旺盛な執筆活動は続き、ヴァイマル期も講演・報告を通して、ドイツ社会事業界をリードする。福祉改革の初期段階でザロモンが直面する課題は、民間福祉団体の財政危機への対処にあった。公的福祉を優先するかのようなヴァイマル憲法の社会国家理念と、1919年結成された社会民主党系労働者福祉事業団の新規参入によって、民間福祉団体の縄張り意識は先鋭化し、早くも1919年に民間優位の公私関係の策定に向けた運動が開始され、相対的安定期に入るまで公私関係をめぐる論争が続く(7)。

公私関係論争に見られるようなイデオロギーの先鋭化、その対立の緩衝地帯になるはずの自由主義の弱さ、労働組合も含めた非民主的で権威主義的な人間関係の温存、さらに中央政府—地方政府の行財政の混乱によって、福祉改革の大半は「絵に描いた餅」になっていた。またインフレーションは、上中層市民の没落を一層加速させた。この急転する時代にあつて、教養市民層の「レディ・モデル」に依拠して形成されたザロモン初期理論は壊滅の淵にあつたと

いえる。

加えて、若い頃からの友人であったはずの女性達による足引き工作で、ドイツ婦人団体連合（以下BDFと略す）会長就任を断念させられるザロモンにとって、母性主義や「女性の文化的課題」の標榜は、ほろ苦い意味合いを持つものになっていった。今やユダヤ人ザロモンにとって、のびやかに活動できる拠点はベルリン女子社会事業学校のみであった。学校は彼女の経済的な基盤であり、理論的な支柱であり、未婚のザロモンにとっての家庭に代わる安全基地となった。ベルリン校2階にある居心地の良いザロモンの執務室や、お気に入りの屋上庭園は、彼女の私的サロンでもあった。ベルリンに住む甥や姪との気楽な交際は彼女の息抜きになるが、公私の生活の区別は学校と一体化していたザロモンにはほとんど見られない。学生のクラシック音楽の演奏を好んで聴いているが、それでさえ学校の寄付金集めの慈善コンサートのメンバー選びのためといった具合に、頭の中は小さな社会事業学校の経営問題で占められていた(8)。学校のために人の何倍も働き、得意の語学力と驚くべき集中力を駆使しながら、国際的な社会事業教育の人脈ネットワークを築いていく。この点でも、社会事業教育に関するザロモンの思い入れは、同時代を生きる社会事業家達を圧していた。

つまり初期理論から離脱し、社会事業学校・社会事業教育に即した理論形成にザロモンを向かわせた個人的な動機は、BDFとの決別にあった。G.ボイマー（Gertrud Bäumer, 1873-1954）やM.ヴェーバー夫人マリアンヌ（Marianne Weber, 1870-1954）らの旧友からも距離を置くザロモンが、ドイツ・中欧に留まらず、ヨーロッパ社会事業教育界の代表者に成長していく布石がここに敷かれた、といえよう。

### 3. 理論形成におけるザロモンの課題…専門職主義の両刃の刃を考 える

ヴァイマル期の社会事業教育が抱え込む新たなジレンマは、私的官吏養成校化に伴って変化するボランティアズムと専門職性の位置づけをどう考えるのかに、つきる。女子社会事業学校の学生や卒業生が吐露する悩みは、そのままザ

ロモンの新たな理論形成に向けての課題となる。

### 1) 母性主義からの脱却の契機となる公務員型ワーカー像の波及効果

母性主義的社会事業理論からザロモンを否応なしに引き離す外圧が、福祉改革を通して具体的に出てくる。次に社会事業教育・社会事業職のザロモンの課題との関連で、四点に整理して列挙してみたい。

①. 母性主義からの脱却は、ヴァイマル期市民女性運動の求心力が急速に弱まることと密接に関係する。BDFを脱会したザロモンは、この中期フェミニズムの変容、即ち母性主義が一定の進歩性を以て運動の手段として有効であった戦前との差を、いち早く感受していた。若い女性活動家の全般的な資質の低さ、例えば参加動機の曖昧さや、教育・研究への持続的な探求心の欠如などは、ザロモンのように自力で這い上がってきた第一世代と比較すれば、一目瞭然であった。また既存の権力機構から排除されることに慣れてきた女性達は、それだけに狭い女性団体に満たされないエネルギーを注ぐ。男性支配の外部組織に対しては「女らしさ」を誇示して、性的役割分業に徹することで支援を受け、内部では権力抗争に明け暮れる傾向が、ヴァイマル期のBDFに蔓延していた。BDF脱会直後のザロモンほど、こうしたドイツ市民女性運動の汚さを子細に知り得た人物はいなかった。父性を権力や競争の象徴とみなして、その対極にある母性を賛美するG.ボイマー流の理論をザロモンが提唱しなくなるのは、この脈絡においても首肯できる。

②. また1920年代初頭から半ばにかけて、父親が出征した銃後の家庭で生活苦を味わい、未曾有のインフレーションを経験した世代が、大挙してベルリン女子社会事業学校に入学してくる。戦前と同様に良家の子女が多いとはいえ、金銭感覚に鋭敏であり、生活の現実を熟知していた。またヴァイマル民主化を謳歌する最初の世代でもあり、私生活優先の現代人に近似する感覚も若干備えていた。中期フェミニズムの「女性の文化的課題」の標語は、彼女らの生活環境下では実感しにくいものとなっていた。

③. 加えて社会事業学校の経営問題も、新たな理念を探求する必然性をザロモンに強いた。ヴァイマル期においては宗派系のような財源がない市民主導の社会事業学校では、学生を集め、経営安定を図る必要に迫られて、国家試験の準



備と資格認定のメリットを売り物にしやすい。そもそも法に忠実なドイツ人気質は、規制の影響を受けやすい。ザロモンも例外ではない。まとまった形での最初の社会事業理論書である『社会福祉事業入門』の1921年版のフレキシブルさと、1928年改訂版との差異に、自主的規制の一例が如実に現れている。福祉関連法規・プロイセン国民福祉省のカリキュラム・授業計画の検討を先取する形の1928年版は、民主化の高揚期に書かれた初版とは異なる実務的で試験対策に徹した内容が書き加えられ、理論としての整合性は初版よりも劣る。未曾有のインフレーションによって彼女の預貯金は底を突いていた。教科書執筆による副収入の確保が必要であった(9)。ドイツ社会事業界を代表し、戦前日本でも広く紹介されるこのザロモンの教科書は、生活の現実をもろに反映していたのである。

④. 先述したように、社会事業職が社会行政・福祉官僚制に組み込まれた結果として、自主的な私的官吏養成校化への傾斜が指摘できる。市民主導型ボランティアの運動が創設したベルリン女子社会事業学校の教員・学生といえども、この点では例外ではなかった。私的官吏養成校化が顕著になり、学内外で不協和音を醸し出すのは、1920年代半ばにおいてであった。

さらに制度化された社会事業教育・社会事業職は、法律と裁量権の狭間で揺れるソーシャルワーカーを量産する。業務規程を優先するか、あるいはクライアントの立場から生活の現実を直視するのか、という専門職主義の両刃の刃に、女子社会事業学校卒業生達は直面する。この二種類の課題にどう整合性を持たせ、社会事業教育の内容と目的を設定し直すか、これが理論形成に際してのザロモンの命題となった。宗派系民間福祉団体の翼下にある施設・病院でも、日常業務が施行規則に縛られ、ここに勤務するワーカーも公務員型に準じていくようになる。ここでもまた母性主義的社会事業理論は、もはや時代錯誤の感を免れ得なかった。

2) 社会事業職の保守性と進取性のジレンマ…女性ワーカーによる女性への支配の構造？

社会事業の専門的な援助が、ヴァイマル期の理念に逆行する権威的・保守的な関係性を形成するのか、あるいは福祉改革の申し子としての民主的・進取的

な関係性の促進と人格（ペルソナ）の尊重に資するものとなるのかの、識別は、意見の分かれるところである。

国家試験の導入によって社会事業職の女性雇用策は維持されるものの、そこでの専門職主義はいわば両刃の刃であった。なぜならば公務員の勤務は、権力行政および特別な人権制限をなしうる特別権力関係におかれるとする当時のドイツ行政法解釈が、社会事業施設・機関の利用関係を支配していたからである。こうして福祉官僚では底辺にいた女性公務員ワーカーが、福祉事務所・児童相談所等の相談窓口や家庭訪問に配属され、施行規則に則った業務規程の枠で裁量権を著しく狭められたまま、対象者・クライアントに向き合うことになる。

ヴァイマル期ザロモンのジレンマは、この制度化がもたらす弊害を意識しつつ、なお制度に即する形で高度な専門職化を目ざす点であろう。彼女の下で学んだ女子社会事業学校卒業生達が直面する問題は、多岐にわたる。例えば——援助原理としてのクライアントの生活全体を考慮しながら、専門性の追求を共時的に行うことの困難さ。専門分業・チームワークの必要を意識しつつも、援助方法は医療モデルが優位になるジレンマ。あるいは自治体の例規と業務規程に呪縛された社会行政・福祉官僚制と、それに準ずる職員の私的官吏としての役割自認。社会事業学校の私的官吏養成校化により、実践の要となる裁量基準やボランティアの福祉思想が形成されにくいこと。逆に業務規程を楯に取り、扶助の申請に対する行政処分の手続きを官僚的・画一的にこなすワーカーが量産される——等々である。またそこでの援助が女性ワーカーによる同じ女性への支配という最も弱いパワー構造を基盤にし、しかもインフレーション後の双方の女性の生活環境には大差がないだけに、国民の給付請求権・受給権と行政の給付決定制度との狭間にたつ両者の関係性は、余計に問題をはらむものであった。

一方、これとは別に、中期フェミニズムから一足飛びに現代的なフェミニズムを予感させる動きも、初めて登場する。ヴァイマル期福祉改革が、対人援助サービス分野への女性の進出を促し、民主的・進取的な援助の関係性を培う場を初めて制度化した功績はやはり否定できない。この時期にはまた大学やその附属学校・研究施設でも、対人援助サービスの専門的な研究者集団の系譜が形

成され、これがやがて公務員ワーカーの職業像と一体化しながら、戦後の高度経済成長期の第2次人間諸科学ブームの下地となっていく。

要するに福祉局・児童局・保健衛生局の公務員ワーカーが特化する状況は、同時にジェンダー化された職業倫理を克服する好機の到来を意味するものでもあった。この時期から、社会事業の職業像は、中期フェミニズムの「レディ・モデル」「女性の文化的課題」を廃棄し、下位の公務員モデルへと移行し始める。むろんソーシャルワーカーを筆頭に、公務員が家庭生活との両立が可能な女性向きの職業という言説はつきまとい、ジェンダー化された職業倫理は生き残るものの、下位の公務員モデルこそが中期フェミニズムからの女性運動の脱却を加速させ、20世紀後半に向けての現代的な「良き母・良き職業人としてのマルチタイプの女性像」の普遍的な羅針盤になるのである。この点でも、ヴァイマル期福祉改革の功績は大きかったといえよう。

### Ⅲ. 民主化の時代の社会事業教育の形とザロモン理論の矛盾

ヴァイマル期にザロモンが何を課題として優先させるのかの把握は、同時に1920年代から30年代前半の西ヨーロッパ全域の社会事業教育が必要としたものを、知る手掛かりになる。この時期のアメリカや国際社会事業学校連盟でのザロモンの活動それ自体が、ヨーロッパ型の社会事業教育や理論を志向する動きとなるからである。紙幅の関係上、アメリカの援助方法の導入や、高度な社会事業専門職論についての詳細は別稿に譲り(10)、本章ではヴァイマル期社会事業の新動向——社会事業教育の民主化と高度な専門職性の志向——に限定して、ザロモン理論の影響と矛盾を検討する。

#### 1. ヨーロッパ社会事業教育の立て役者ザロモン

ヴァイマル期福祉改革を反映する社会事業教育の新たな動向は、①社会事業教育の民主化と、②社会事業教育の高度な専門職性の志向の二点である。いずれもザロモンが主導権を握っていた。

ザロモン理論の円熟期は、ベルリン女子社会事業学校長を後任に託す決意を

する1925年以降であろう。この時期になると時間的にも経済的にも余裕がでてくるザロモンは、ドイツのみならず、ヨーロッパにも通用する社会事業教育の理論的な集大成に意欲を燃やす。代表作『社会事業職教育論(Die Ausbildung zum sozialen Beruf)』(1927年)を刊行し、ジェンダー化された職業倫理とは別の社会事業固有の概念規定や援助方法論の開拓にも余念がない(11)。1920年代後半になると、当時ドイツに怒濤の如く浸透するアメリカ文化の影響もあって、アメリカの心理学・社会学の成果に学ぶ若手研究者が、ベルリン女子社会事業学校の非常勤教員や関連施設の職員として勤めるようになっていた。ザロモンも率先して彼女らと共に、アメリカ・ケースワーク理論を下地にして、援助方法論のドイツ版の作成に尽力する。

確かにドイツ的特徴といえるジェンダー化された職業倫理は、なお円熟期ザロモンの著作でも散見できる。しかし、「女性の文化的課題」の強調はボランティアリズムについての章、節に限定されており、主要部分を成す社会事業の職業論や高度な専門職性を目ざす教育論では、初期理論とは異なり、法と制度と実体に即した専門的内容を打ち出している。同時期の欧米社会事業界で、一定の研究水準を保ちながら、定義・歴史から最新の社会事業教育情報まで盛り込んだこの種の大著はなかった。それだけに『社会事業職教育論』刊行を境に、ザロモンは名実共に、ヨーロッパの社会事業教育界を代表する論客となった。

ザロモンは、その活動期間の長さや国内外の活躍舞台の広さにおいて、ナイチンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) には及ばないとしても、同時期の対人援助サービスの職業化に尽力した女性リーダーの中では、群を抜く。何よりもザロモンの強味は、一種のオーナー社長的な立場で、20世紀初頭からベルリン女子社会事業学校を拠点にして、理論形成ができた点であろう。1920年代、ソーシャルワーク校の数ではアメリカとドイツが群を抜いていた。しかし、ドイツの女子社会事業学校の大半が宗派系経営であり、聖職者の資格を持つ人物が校長に任命された点で、初期社会事業学校の創設者世代のような学校への愛着はなかった。アメリカやイギリスの女性の場合、経済界や大学で活躍できる機会も多々あり、社会事業教育にのみ集中して情熱を傾ける人は少なかったし、アメリカのソーシャルワーク校では経営母体の博愛事業団体や理事

会から派遣される校長が多く、その在任期間も長くはない。

つまり社会事業成立期において、ザロモンほど長期にわたり、社会事業教育とその政策提言でパワーを発揮し続けた人は稀であった。第2次大戦前まで、ドイツがヨーロッパの理論・実践の牽引力であり続けるのも、また国際社会事業学校連盟を介してヨーロッパ型社会事業教育を目ざす国際ネットワークができるのも、ザロモンとその系譜の女子社会事業学校の存在なくしては、ありえなかったといえよう。

## 2. 民主化の時代の社会事業教育の形…高度な専門職性の拠点ドイツ・アカデミー

### 1) 社会事業教育の民主化の端緒

12年の短命に終わったヴァイマル共和国は、民主化の実現にはほど遠い政治・経済的な混乱の時代であった。福祉改革の理念と現実の格差は大きかった。しかし、ヴァイマル民主化が、「福祉国家への道」を開拓した点は看過できない。近隣諸国に眼を転じれば、イタリアや東欧よりは民主化の歩みは着実であったし、その期間も長い。12年といえども、社会事業や学校教育に民主化の影響は多分にあった。

社会事業教育の民主化は、児童・青少年福祉法の施行（1924年）で教護教育を中心に男性の対人援助職の需要が高まることと、社会事業学校を労働者の子女にも有利な入学条件に変更したことで、一定の進展を見せる。女子の形容詞を撤廃する形で一部の社会事業学校では男性が入学する。男性の入学者総数は少なかったとはいえ、母性主義的社会事業理論に依拠する職業化を拒否する第一陣が輩出される事態は、戦前とは異なる大きな変化であった。

この民主化の高揚期に、ベルリン女子社会事業学校の門戸が労働者階層の子女や外国人にも開かれ、最初の日本人聴講生として長谷川良信（1890-1966）が受け入れられたのを筆頭に、多くの日本人がベルリン校とザロモンを訪問し、大正期から昭和前期のわが国の社会事業教育のドイツ・モデルの導入に努める系譜となる(12)。さらに福祉改革から派生する社会事業教育の民主化や国際化の動きは、戦後西ドイツの対人援助の諸理論と専門職化に連携していくのであ

る。

## 2) ドイツ・アカデミーのザロモン人脈の息の長さ…復古的職業倫理と民主化路線の混在

25頁に示した②の高度な専門職性については、ウィーン・フランクフルト・イエナ・ミュンヘン大学などで社会教育学・治療教育学講座が開設され、対人援助サービスの指導者養成が本格化することや、大学院レベルの女性のためのドイツ・アカデミーが設立され、博士号を取得した若い女性研究者による家族調査・家族社会学の共同研究が始まるといった例が目安になる。特に後者のドイツ・アカデミーは福祉改革の嫡子と目され、女性のための高度な専門職業人の教育・研究機関としては、国際的に見ても例のないものであった(13)(14)。

政治経済が相対的安定期に入る時期からザロモンは、新理論と具体的な実践との結合に着手し始める。それがドイツ・アカデミーの設立であり、アメリカとは異なるヨーロッパの独自の援助方法・理念を重んじる社会事業教育の国際ネットワーク化であった。

1927年からのザロモンは、ベルリン女子社会事業学校長を後継者に委譲し、アカデミーの仕事に専念する。教育・社会事業・保健衛生分野の大学院レベルの専門職業人・研究者養成コースがアカデミーの目玉であった。また需要の多いソーシャルワーカーのスーパーバイザーの再教育にも力を入れた。高度な専門職性を目ざすキャリア志向の女性が主たる入学者であった点でも、この時期におけるザロモンは母性主義的社会事業理論を離脱し、男女を問わない中立的な専門職論を中核に据えた理論を目ざしていたといえる。

ドイツ・アカデミーで展開されたドイツ的な「女性学」を支えに、女性に有利な雇用政策を推進する戦略はある程度は成功した。ザロモンが表舞台から去った後も、このドイツ的な「女性学」に関与したドイツ・アカデミー関連の人脈——ザロモンの身近で高度な専門職性を発揮する機会を与えられながらも、ナチズム期にザロモン批判を繰り返す弟子や知人も含む——は生き残る(15)。戦後西ドイツの最初の国家議員に選出された女性4人中3人が、過去に社会事業に携わっており(16)、しかもアカデミーから触発を受けた女性達であったことが、その証左になろう。

要するにヴァイマル期に国民福祉省や自治体行政で活躍したザロモンの人脈は、1950年代末まで西ドイツ社会福祉教育の理論・実習教育の指針を統括し続けたのである。他方、初期理論と結びついていた市民女性運動や宗派系社会事業学校の運動戦略はなおジェンダー化された職業倫理を優先した。その結果、中期フェミニズムは、1950年代までザロモンに繋がる女性達の人脈——繰り返しになるがザロモンの追放に手を貸した者も含む——を通して、社会事業理論・教育界を支配し続ける。こうしてドイツ・中欧の中期フェミニズムの抜本的な問い直しは、68年世代の登場まで引き延ばされたのである。

### 3) ザロモン理論の矛盾についての小活

さて、グローバルな視点からザロモンの理論破綻の原因を追及するIV章に入る前に、ヴァイマル期ザロモン理論の特徴を整理してみると、概ね「1920年代初頭の福祉改革によって、社会事業職は国家試験・資格認定を介して社会行政・福祉官僚制の管轄に組み込まれた。制度化された社会事業教育も一応は成功するものの、拙速な福祉改革によって、逆機能の増幅が目立つものとなる。この矛盾をいち早く認識できたザロモンは、民主化の時代に適した社会事業教育と理論形成を旨とするのではあるが、結果的には第二帝政期の市民モラルへの回帰という復古的職業倫理と、ヴァイマル民主化路線の改革的政策提言とが、奇妙に混在する社会事業理論が普及してしまう」と、まとめられよう。

次章ではザロモン個人の資質と市民女性運動の保守化にのみ理論破綻の原因を帰した前稿から離れて、社会事業教育の国際ネットワークに刻印された政治力学に着目しながら、国民国家の枠組みで制度化された社会事業教育と理論形成の在り方を批判する見地から、考察を進めていきたい。

## IV. 社会事業理論史から見たザロモンの理論破綻の真の原因は何か

### 1. 国際通ザロモン

1920年代後半、ヨーロッパ社会事業教育界の第一人者となるザロモンは、1937年の亡命直前まで、アメリカも含めて社会事業学校・社会事業教育に関す

る最新情報の収集に関して、最も有利な立場にいた。ヴァイマル期ザロモンは、アメリカやヨーロッパ各国の社会事業学校関係者と活発に交流し、援助方法や理論科目と実習教育の組み合わせ等の情報収集に余念がなかった。社会事業学校連盟を設立し、それが主催する国際会議のヨーロッパ側の主導権も握るザロモンは、スイス・ジュネーブの連盟事務局で、亡命直前まで一種の委託研究として社会事業教育の国際情報を誰よりも早くキャッチし、資料を駆使して執筆活動をしていた。つまりニューヨーク・ソーシャルワーク校での理論破綻は、ザロモンが最新の知識・技術に疎かったからではない。英語も堪能であった。同世代の社会事業界の指導者で、ザロモンほどの国際通も珍しい。彼女はまぎれもなく、国際福祉の組織化の総元締めでもあった。

それなのに、何故に壇上で立ち往生するほどの理論破綻という悲劇が生じたのか。彼女が高齢で、やや痴呆気味であったとか、亡命後の不安定な生活で疲れていたとか、という公式的見解が妥当なのだろうか。長年講義から離れていたことや、亡命前後の心労が、彼女から集中力を奪っていたことは事実であろう。しかし、痴呆気味と悪評された彼女が、その後数年たって、最後の自叙伝を、それも英語で執筆する。それがドイツで公刊されるのは、1983年にすぎないが、ザロモンの筆致は周りの人に迷惑を及ぼさないように実名を出さないものの、ナチスに妥協・協力した人物が誰であるかが、推察できるだけの最低限の情報は記していた。感情を理性で抑え込んだ筆致。これがどれだけ知性と判断力を要する仕事であったことか。

またもともとザロモンが講義は下手であったという、社会民主党員の元教え子の証言もあるが、これも一面的な見方でしかない。彼女が話術に巧みで、国際会議の花形スターであったという証言も多いからである。事実、講義が下手では、国際舞台の司会者や、アメリカでの講演旅行に二度も公式招待され、大統領のパーティにも招かれ、各地の博愛事業・社会事業団体で絶賛をあげるスピーチをすることもなかったであろう。とすれば、ニューヨーク・ソーシャルワーク校での理論破綻の主因は、別の所にあると考えざるをえない。以下、ザロモン個人の資質を越えた理論破綻の原因と考えられるものを、列举してみよう。



## 2. アメリカ博愛事業団体の政治的意図と制度化された社会事業教育の功罪

### 1) アメリカ博愛事業団体の政治的意図とザロモンに期待された役割

ザロモンの1920年代から1936/37年までの国際的な活躍は、ラッセル・セイジを筆頭にするアメリカ博愛事業団体の支援が大きな役割を果たした(17)。平和運動の母といえるJ.アダムズ (Jane Addams, 1860-1935) の僚友とみなされていたザロモンに対して、ヴァイマル期初頭にアメリカは招聘・講演旅行という栄えある機会を与えるし、ザロモンが主導権を握っていた1928/29年のパリ国際社会事業会議や国際社会事業学校連盟の結成も、アメリカ博愛事業団体の財政支援なくしては不可能であった。

ナチスによって公職追放され、1933年春以降の活動は国際的なものに限定されるとはいえ、なお活躍の余地はあった。亡命直前まで、国際比較の本を執筆するという厚遇を、それもスイス——1936年時点ではスイスは外国人亡命者・難民受け入れには極めて厳しかった——で受けていた。これは知名度の高いユダヤ系ドイツ人への処置では、国際的な体面を気にしていたナチスと、ザロモンを支援する外国の知己との間での交渉の成果でもあった。

博愛事業団体・市民女性運動・教会関係者から成る外国の知己が、彼女に期待した役割は、平和運動と連動する形での社会事業教育の普及であった。むしろこの時期の平和運動は理念倒れが多く、それがまた彼女のアメリカでの挫折体験にも繋がるのであるが、招聘の機会を用意するスイスやノルウェーは、中立国の仲介でナチス政権と妥協し、ヨーロッパでの戦争を回避するとの意図を持っていた。この点でザロモンは利用価値のある人物であった。それが亡命者になった彼女の待遇の差に、明確に現れる。ドイツ社会事業界の代表の看板をなくした彼女は、老いた貧しい一人の亡命者でしかなく、緊張緩和の意味での政治シンボルとしても無用の長物であった。アメリカで彼女が、かつて厚遇してくれた博愛事業団体・社会事業関係者の冷たさを愚痴るのは、こうした政治的背景も考慮に入れねばなるまい。

### 2) 制度化された社会事業教育の教育目的の曖昧さ

国家試験の受験資格を得るために、社会事業学校で所定の科目を学び、単位

を取るというルートで、全国的規模で一貫した社会事業教育を実施する最初の国は、ドイツであった。1920年の社会事業職の国家試験・資格認定の制度化によって、公式見解としてボランティアリズムの未分化は一応解消できたといえるし、公務員型ワーカーがモデル像となることで母性主義的社会事業理論は勢力を弱め、ジェンダー化された職業倫理も建前としては表面化しにくくなる。しかし、専門的な教育と職業的な教育の区分けは、なおつきにくかった。というよりは、教育目的の拡散こそ、社会事業教育の普及の一つの尺度でもあった。現時点から見れば、ボランティアリズムの未分化という状態は必ずしも専門性が曖昧というわけではなく、むしろ総体としての社会事業教育が普及する段階に入った証左でもあるのだが、この一見相反するベクトルの動きを見極める洞察力を、同時代に生きる社会事業界の指導者達——社会事業に生活も生きる意味をも賭けていた女性や、逆に気軽に単なる名誉職として社会事業学校や民間福祉団体の理事に名を連ねる男性——に、求めるのは無理があろう。

1920年代から30年代前半、欧米で社会事業が(半)専門職として普及するのに伴って、欧米各国の社会事業学校の教育論・援助方法論も、拙速な体系化に向けての動きを見せる。適材適所に教員・事務職員を配置できない、力量のある教員を各専攻に配置できない、読み替え科目が多い、カリキュラムの時間数を厳守できない、何よりも実習先の確保が難しいといった問題に、各国の初期社会事業学校はすぐに直面する。慎重であるはずのドイツ人でも、日常実践の課題に突き動かされて、「走り出してから考える」式で、社会事業学校のカリキュラムを決定していく。

時代の揺れ幅が極めて大きいヴァイマル期にあって、福祉改革や民主化の課題を背負いながら、女子社会事業学校経営の舵取りを強いられるザロモンの困惑は大きかった。福祉国家理念の標榜に反比例する形で、福祉思想が弱体化し、制度・政策が自己運動を展開し、結果的には福祉改革の空洞化現象が各地で生じていた。市民主導型ボランティアリズムを育てつつ、同時に専門的・職業的な社会事業教育の向上を図るというザロモン理論も、急転する現実の前には見通しのききにくいものになっていた。

つまりザロモン理論だけが破綻したのではない。同時期の欧米各国の社会事

業成立期の理論もまた、短期で破綻する運命にあった。社会事業理論の難しさは、それが学校・施設の設立ラッシュが始まる初期の段階で、学生確保や学校経営の効率化という戦略と連動して形成されていたという点にある。アメリカやドイツの宗派系以外の市民主導型の学校では、似たような経営・運営管理の不安材料を抱えていた。また欧米の初期社会事業学校では、発足当初から実習教育と現場との連携、並びに雇用開拓が重要な教職員の業務課題になっていた。それだけに既存の大学アカデミズムの法学・医学・心理学・教育学などの理論枠組みでは、社会事業の理論体系は困難であるとの共通認識も、社会事業成立期の指導者達は持っていた。これに多くの欧米の社会事業理論家は巻き込まれた。

### 3) 理論破綻の露呈が遅れた理由

ここまで書けば、なぜザロモンの理論がニューヨーク・ソーシャルワーク校で破綻したのか、その原因も自ずと明らかになろう。女子社会事業学校という制度や国家試験と一体化した理論については、彼女が1933年にドイツ国内の一切の公職を解かれる前から、小さな批判の声が散見できる。しかし、ナチズム初期の段階では、ナチスも彼女の国際的名声を利用したがつたし、国際社会事業学校連盟や関連団体も、ヨーロッパの平和運動・女性運動の実務家のシンボルとして、ザロモンになお多くの期待を寄せていた。共産党やナチス党が躍進する時期から、アメリカの大規模贈与型の博愛事業団体は、国際平和運動との絡みでヨーロッパの緊張緩和の緩衝剤の役割を果たそうとする。1930年代前半、ザロモンに幾度となく海外講演・報告の場が提供されるのも、国際平和運動を財政面で支援——特にユダヤ系財閥の寄付——するアメリカ博愛事業団体の思惑があった。より率直に言えば、ヨーロッパからの大量難民を引き受けたくないアメリカ政財界の思惑があったといえる。こうしてザロモンはユダヤ系である故に、国際的には1930年代前半、なおも寵児であり続けた。

この自己の能力を過信し、アメリカ社会事業界の厚遇をなおも期待して亡命するザロモンを待ち受けていた結末は、ニューヨーク・ソーシャルワーク校での講義の中断であった。聴くに耐えないと言う悪評をふりまかれ、壇上から引き吊り降ろされるザロモンの姿は、一国型に傾斜する社会事業・社会福祉理論

の最も早い破綻の事例として、示唆に富む。

## V. 結

### 1. 「生きる力」と理論の創出

福祉思想が曖昧な生活感情や時代思潮の非人格性を脱し、個の人格に内面化された意見表出を通して論理化され、最終的に抽象度の高い理論・概念に至るという、通常理論形成過程のどこで(18)、ザロモンは挫折したのであるか。また挫折という点で、同世代の他の欧米社会事業理論家との間に差異があるのだろうか。ザロモン理論だけが、欠陥が目立つものなのであるか。それよりは、ソーシャルワークという新種の職業に付随する試行錯誤的な学校教育制度や実践課題に結合させられた理論形成の在り方が、破綻の真の原因なのではなかろうか。

社会事業成立期からヴァイマル期までの論争を通して見えてくるものは、率直に言って不毛の一語につきる。「論争での緊張関係を維持しつつ、しかも競争と理論修正のフレキシブルさを失わず」という姿勢は、相当の研究者訓練を経なければできにくい。これを中期フェミニズムの市民女性に要求するのは、まず無理があった。大学で博士号を取得するザロモンやボイマーといえどもこの点では例外ではない。彼女らは、理論研究を続行するだけの環境や周囲の理解に恵まれていたわけではないし、理論を創るという高い目的意識を持っていたわけでもなかった。経済不況と政治的混乱によって、ヴァイマル民主化を失敗と感じ、価値を喪失する人々が急増する時代の危機を見据えて、倫理や徳を掲げてボランティアリズムを強調するザロモン理論は、若い世代には時代錯誤と一蹴されがちであった。聴衆の反応に気づかないほど、ザロモンが鈍感であったとは思えない。だが執筆が大好きで、対外的な折衝に忙殺されるザロモンには、学内で左派右派のイデオロギーに振り回される学生の教育に、多くの時間が割けなかった。新時代の現場の声を汲み上げ、実習先の開拓や雇用拡大に生かす仕事は、部下や弟子に任せたままであった。

同様の誤謬は、主流派として社会事業界と社会事業理論の動向を牛耳れるだ

けの人数を誇るカトリック・プロテスタント系社会事業学校の校長・教員にも当てはまる。彼らは、聖職者やその親族の子弟・子女が多かった。幼少期から聖職ないしはその周縁での、いわゆる天職（Beruf）につくことを期待されていた。キリスト教系の女子校や施設・病院に卒業後に勤務する条件で奨学金をもらい、大学まで進むことができた。彼らの学生生活は贅沢なものではない。しかし、生活費の工面や就職口に悩むという職業的自立に際して、通常の若者が経験する苦労を彼らはしていない。つまり宗派系社会事業学校教員で、メイン科目である「社会事業とは何か」を講義する者の大半が、生活感情を内面化し、「生きる力」を発揮するには、やや過保護な生活環境の中で、多感な青春時代を過ごしていたのである。「衣食住の生活費の工面」から「自由」である者が、生活困窮・生活不安の問題意識を核にする福祉思想や対人援助の理論を創るという矛盾に気づく者は少なかった。

「生きる力」は、理論を創る者にこそ、必要であった。ザロモンの成功と挫折は、ここに関わる。経済苦は若きザロモンの背中に張り付く十字架であった。思春期に向学心を阻まれ、神経質で病弱の母親を養う責任も担う彼女は、社会事業界で活躍する同世代の女性の誰よりも、生活の厳しい現実を知り、貧しさに対処する生活力をつけていた。しかも、世紀転換期に国際的に中期フェミニズムと「ソーシャルワークの創出」を繋ぐ女性ネットワークを介して、イギリス貴族のノーブレス・オブリージュから触発を受けていた。これが彼女の初期理論の大々的な成功に繋がる。そして成功者となったが故に、彼女が生活感情を忘れるほどに出世した時から、彼女の理論も、そして福祉思想さえも、坂道を転がるようにして現場から乖離していく。親戚の者が見れば仰天するであろう程の高価な洋服を彼女は、1928年パリの国際社会事業会議の晴れ舞台のために注文していた。贅沢な家具調度品に囲まれ、料理や掃除といった家事は「女中」に任せ、若き日に夢見た教養市民らしい優雅で知的な生活を、執筆と学校経営で現実のものとした(19)。余りにも出世しすぎたヴァイマル期後期のザロモンには、的確な現場の声が入りにくくなっていた。この矛盾が一挙に吹き出るのが、ニューヨーク・ソーシャルワーク校での講義の中断であった。

## 2. 国民国家のための福祉思想・理論の行く着く先

国民国家形成期の成果である社会事業・社会保険制度と、国民国家成熟期の成果である福祉国家との接点は、国あるいは地方自治体の政策課題と制度化に絡め取られた一国型の理論形成に留まらない。国民国家のための福祉思想が理論と合体する場合、同じく国籍が付与され、歪曲化した解釈が普及しやすい。その欠陥を最も早く示す事例が、母性主義的社会事業理論の克服を旨しつつも、女子社会事業学校制度とジェンダー化された職業倫理との一枚岩的な構造に呪縛されたザロモンの誤謬であった。

序の課題との関連で整理すれば、ザロモン理論を時代の限界として片づけるのは、短絡的な批判であろう。社会福祉の概念規定や、社会福祉教育・援助方法原論に目を転じれば、現代においてさえ、理論が一種の閉塞状況にあることに気づかされるからである。既存の人間諸科学の枠組みに、好むと好まざるとに関わらず、依拠する私達の思考回路は、社会事業という制度・政策が登場してからたえざる理論の形成・論争・破棄を繰り返してきた。このシジフォスの神話を断ち切ることは、社会事業理論史研究の任務ではない。しかし、現在の理論的混乱を回避しながら、理論の負の遺産を分析・解明する歴史研究を通して、生起する多数の理論の中から、危機を突破する理論、時空を越克する理論を識別する力を培うことはできる。21世紀福祉社会を支える国境を越える普遍的な理論も、社会事業成立期に遡及される国籍を付与された福祉思想・理論の終焉を認識することで、初めて可視的なものとなるのではなかろうか。

### 注

- 1) 岡田英己子「A.ザロモンの初期社会事業理論」(『人文学報』東京都立大学人文学部 第301号, 2000年) pp.1-23.
- 2) 晩年のニューヨーク・ソーシャルワーク校での理論破綻については、岡田英己子「1930,40年代のA.ザロモンの社会事業活動…流浪の民として」(『社会事業史研究』第21号, 1993年) pp.61-74.
- 3) ザロモンの社会事業理論の時期区分と各期の特徴は、以下の通りである。
  - ①初期理論：市民女性運動の「女性の文化的課題」をストレートに反映。同時に

ヴェーバー・サロンとベルリン大学で倫理的国民経済学の基礎理論を学ぶ。

②中期理論：ベルリン女子社会事業学校が専門学校として発足する1908年頃から1920年頃までを中期とする。この時期のザロモンの課題は、女子社会事業学校の制度化を支える理論・教育方法の確立と普及であった。理論形成の転機となる事件として、大戦期の戦争協力と、戦後のBDF脱会があげられる。キャリア志向と平和運動志向の複雑な心境が中期の特色。

③後期理論：これは三期に分けられる。ヴァイマル期福祉改革の法的枠組みが完了し、同時にザロモンがベルリン女子社会事業学校を後継者に譲る決意をする1925年頃までが第1期。以後、1933年にドイツ国内での一切の公職を追われるまでを第2期。第3期は亡命する1936/37年までで、国際社会事業学校連盟や女性運動の国際会議での限定付きの国際活動を展開する時期である。

④晩年：英語で書いた自叙伝を売り込み、自叙伝刊行が挫折する時期。晩年はザロモン社会事業理論の時期区分には入れない。社会事業職の資格認定の学校・学生から実践現場に至るまでの理論普及の全てのルートを、亡命者ザロモンは失うからである。

- 4) 岡田英己子「アリス・ザロモンの生涯とその業績…ベルリン女子社会事業学校の成立過程を中心として」（大阪市立大学生生活科学研究科社会福祉学専攻修士論文，1976年）で、ザロモンの通史を試みている。
- 5) ヴァイマル期福祉改革は、第2次大戦後の占領期日本の状況に匹敵する。児童・青少年福祉法による児童の権利は憲法と連動していたが、扶助義務令では不服申し立ての不備を残し、生存権保障の解釈をめぐる憲法の空洞化問題の先駆例となった。福祉改革の概要については、岡田英己子「ドイツ社会事業成立期の社会事業理論からみた優生学・優生思想の特徴…ジェンダー化された職業倫理と『家族共同体型』福祉国家思想の枠組みを通して」（『ドイツ研究』第31号，2000年）pp.63-65.
- 6) 1922年児童・青少年福祉法によって、ジェンダー化された職業倫理の男性版が登場したとの解釈も近年出されている。イギリス流の「レディ・モデル」に対置する「騎士モデル」として、教護教育と義務教育終了後の青少年の社会教育の分野で、男性専従者の需要が高まることは確かである。しかし、1922年法は1924年の施行に当たって、財政難のために大幅に規模が縮小され、かつ有能な青年をひきつけるは

どの魅力——例えば待遇や将来性——が、社会事業職には欠けていたためか、ヴァイマル期もなお女子社会事業学校卒業生が、社会事業職の主流派を占めていた。

Zeller,S.:Geschichte der Sozialarbeit als Beruf.Paffenweiler,1994,S.93-95.

- 7) 地方政府・中間諸団体では、旧支配勢力の権威が概ね温存された。この第二帝政期への復古路線は、民主党の社会改良路線や共産党・社会民主党左派の革命路線と真っ向から対立した。ヴァイマル期福祉改革も、その渦中に巻き込まれる。各種福祉施設・病院、在宅支援や相談業務は、従来と同様にカトリックとプロテスタント系の福祉団体が主たる担い手であり続けただけに、1919年に社会民主党翼下の組織として結成される労働者福祉事業団の存在は、脅威と映った。慈善・博愛事業や自治体の救貧事業の名誉職・ボランティアを一手に担ってきた既存の民間福祉団体の反感は強かった。こうして1919年から公私関係をめぐる社会事業論争が巻き起こる。論争は対社会主義という点では一致団結するカトリック・プロテスタント系福祉団体の組織防衛が優先され、公的福祉に対する民間福祉優位の原則が主張された。これはまた社会事業教育を——公教育の場での宗教教育を世俗の架橋にしたい教会側の意図と同様に——既存の複線型学校に押し込め、従来通りに女子教育の学校政策の主導権を持ちたい保守主義・教会の意向にもかなっていた。なお公私関係論争をリードする1919年10月のザロモンの講演は、民間福祉擁護の課題を優先したためか、慣れ親しんだボランティアを強調し、社会民主党・労働者福祉事業団の公的福祉一辺倒に対する歯止めを徹している。Muthesius,H.(Hg.):Alice Salomon.Die Begründerin des Sozialen Frauenberufs in Deutschland.Köln/Berlin,1958,S.179-187.
- 8) ちなみにインフレーションの時期に、女子社会事業学校の評議会議長の仲介で、ベルリン市がベルリン女子社会事業学校の教員俸給の支払いを肩代わりした。これによってザロモンは経営危機を脱した。以来、現在に至るまでベルリン社会行政当局とベルリン福祉大学（正式名はアリス・ザロモン大学）との関係は緊密である。伝統的にリベラル派・左派の女性教員の多い同大学は、冷戦の象徴「陸の孤島」ベルリンで、先駆的な福祉実践を試みている。他地域に先駆けて開始された一人暮らしの高齢者の在宅介護、障害児の統合教育、障害者の自立生活運動などをリードしたのも、同大学の教員や、68年世代の学生達であった。
- 9) 初期理論以外のザロモンの女子社会事業学校での社会事業理論の教科書は、Soziale



- Frauenbildung und Soziale Berufsarbeit. (Leipzig,1917)。ヴァイマル期は、Leitfaden der Wohlfahrtspflege.(Leipzig,1921,3.Aufl.,1928)が代表的であり、戦前日本においてもよく紹介されている。増田道子・高野晃兆訳『社会福祉事業入門』（社会福祉学双書10, 岩崎学術出版社, 1972年）の邦訳が優れている。
- 10) 『ドイツ社会福祉教育の成立史研究…A.ザロモンの福祉思想・理論とジェンダー化された職業倫理の功罪』の表題で、単著を準備中である。紙幅の関係上、本稿ではザロモン著作から逐一引用して論証することは避けた。また晩年ザロモンに関する記述で、これまでに公表した論文と重複する箇所も省いている。
  - 11) 1927年の著書はザロモンの代表作である。同時期に刊行するWronsky, S./Salomon, A.: Soziale Therapie. (Berlin,1926) は、アメリカのケースワークの紹介に留まらず、ヨーロッパの最初のケースワーク理論書でもある。
  - 12) ヴァイマル期に、ベルリン女子社会事業学校は国際的にも知られ、アメリカや日本からも留学生・研究生を受け容れる。こうした国際交流が刺激となって、ザロモンはアメリカ援助技術の紹介を皮切りに、関連諸科学の動向に敏感に反応し、家族社会学や家族調査法をドイツ・アカデミーの共同研究に導入する。
  - 13) ドイツ・アカデミーの設立には、女子社会事業学校卒業生のキャリア・アップと、学校経営者ザロモンの思惑があった。またプロセインにおける教員養成のための教育アカデミーの設立ラッシュにも、触発されていた。1928年フランクフルト大学の社会事業講座から発せられた女子社会事業学校の閉鎖性への批判を無視して、ザロモンが女子社会事業学校設置運動を正当化する背後には、生活を賭けた理論形成の姿勢があった。それが初期理論から離脱した後もジェンダー化された職業倫理を強化し、制度化された社会事業教育と一枚岩になって威力を発揮する。ドイツ・中欧では、家族共同体型福祉国家思想の伝統が強いとはいえ、それを理論化したザロモンと、戦後西ドイツCDUの女性・子ども政策にまで繋がるザロモン人脈の影響は、看過できない。なお大学での社会事業職の養成をめぐる論争は、岡田英己子「ドイツ社会事業成立過程における職業化についての一考察…ベルリン女子社会事業学校を通して」（『社会福祉学』第26巻1号, 1985年）pp.120-120を参照。
  - 14) ドイツ・アカデミー以外に幾つかの大学が、社会事業分野での高度な専門職業人の養成課程を設置する。1910年のフランクフルト大学の「社会事業と統計学特別講

座」を皮切りに、ミュンスター・ゲッチンゲン・フライブルク・ケルン大学が、ヴァイマル期福祉改革の前後に社会事業講座や課程を設ける。また1916/17年からブレスラウ高等専門学校では、指導的立場に就く行政官僚のコースが設置される。しかし、社会行政・衛生行政の高級官僚が、法学部・医学部出身者で占拠される現実を目の当たりにして、出世コースから離れて社会事業関連の講座・課程を希望する男性は少なかった。また当時大学に進学する女性の場合、専門学校イメージ色の強い社会事業をわざわざ大学で専攻する者も稀であった。

一連の大学・高等専門学校の動向については、以下の文献を参照。

Salomon, A.: Die Ausbildung zum sozialen Beruf. Berlin, 1927, S. 183-187, や Salomon, A.: Leitfaden der Wohlfahrtspflege. Leipzig, 3. Aufl., 1928, S. 178, あるいは Radomski, H.: Die Frau in der öffentlichen Armenfürsorge. Berlin 1917, S. 106.

- 15) ドイツ・アカデミー所属の女性研究者群による家族調査・家族社会学の高水準の故に、アカデミーの存続をめぐる利害対立は目立つものであった。アカデミー対フランクフルト大学社会事業講座の論争以外にも、社会事業の職能団体・労働組合の標的にザロモンはされた。彼らはBDFとは比較にならぬ少数派であるとはいえ、左派右派ともにザロモンを批判対象に選ぶ傾向があった。また家族調査の共同研究者でもあったM.バウム (Marie Baum, 1874-1964) との方法論の食い違いに代表されるような、研究上の対立もヴァイマル期末期に、アカデミーの問題として表面化する。アカデミーのような大学院レベルの教育機関がなかったドイツでは、羨望も重なって後継の地位をねらう女性が多かったのである。ナチス政権が樹立されるや、アカデミーからのザロモン追い出し工作が始まる。晩年ザロモンは自叙伝で、この間の苦渋に満ちた経緯を匿名で記している。自叙伝が1983年までドイツで刊行できなかった最大の理由は、ザロモンと一緒に仕事をすることで出世し、ナチズム期に批判する側に回る社会事業界指導者層の、戦後西ドイツにおける暗黙の了解があった。
- 16) Zeller, S.: Geschichte der Sozialarbeit als Beruf. Paffenweiler, 1994, S. 177.
- 17) 1932年フランクフルトでの第2回国際社会事業会議開催の背後にも、アメリカの財団の資金提供があった。これは、1923年ワシントンにザロモンと共に招聘され、それを機に国際社会事業会議の準備を一緒に進めることになるベルギーのサンド (René

Sand,1877-1953) が、アメリカとの仲介に努めた成果であった。ヨーロッパの緊張緩和・戦争回避に社会事業関係者が尽力した一例となる。Peysen,D.:Alice Salmon. Ein Lebensbild. In:Muthesius,H.(Hg.):Alice Salomon.Die Begründerin des Sozialen Frauenberufs in Deutschland.Köln/Berlin,1958,S.101,S.107.

- 18) 主体的な人格に基づく意見・理論なのか、あるいは非人格的な思想なのか、さらにまた重層構造化された思想の連続と断絶の関係性はいかなるものか等についての示唆は、主に吉田久一著作集や丸山真男の講義録——例えば図1——を参照した。

図1：「思想」の成層



『丸山真男講義録 日本政治思想史 1965』（第5冊 東京大学出版会1999年）pp.15-17.

- 19) Peysen,D.:Alice Salmon. Ein Lebensbild. In:Muthesius,H.(Hg.):Alice Salomon.Die Begründerin des Sozialen Frauenberufs in Deutschland.Köln/Berlin,1958,S.105,S.109.